国際ボランティアと連携した新たな異文化理解教育の可能性

研究実践事例 3

■ 久保田真弓
関西大学総合情報学部。Meet the GLOBEプロジェクト（http://www.med.kutc.kansai-u.ac.jp/~meetg/）代表

■ 松井克行
大阪府立西淀川高等学校地歴公民科。開発教育を含めたグローバル教育のカリキュラムや単元開発に取り組む。また、学校と社会を結ぶコーデュネーターとしてNGO等の方を外部講師として学校に来て頂く授業を展開中。2001年度開発教育地域セミナー<関西ブロック>実行委員。神戸開発教育研究会に所属。
メールアドレス：matsui-katsuyuki@cam.hi-ho.ne.jp

1. はじめに

近年、青年海外協力隊に参加し派遣される隊員のうち9割強がパソコンを任地に持参するようになっている。なかには、現役の教師が参加し、個人レベルで途上国の子どもたちと日本の教え子たちとをインターネットでつなぎ交流したり、途上国の状況を随時インターネットで発信しているものもみうけられる。

そこで、このような途上国からの隊員による情報発信を、日本国内にいる人々の国際理解教育に役立てることはできないかと考え、Meet The Globeプロジェクトと称し、隊員と高校生との交流学習を試みることにした。

本稿では、実践した事例のひとつを紹介することにより、国際ボランティアと連携した新たな異文化理解教育の可能性を探ることにする。

今までの海外との電子メールを利用した交流学習では、日本語補習校とのやり取り、先進国にある学校との英語によるやり取り、情報収集のためのやり取りなどが主であった。しかし、このプロジェクトでは、日本語による電子メールのやりとりを、一定期間にわたり行うことで相手とかかわりをもたせ、英語教育と切り離して実践する点に特徴がある。

2. 授業実践

大阪府立西淀川高校3年生、選択科目「地理A」（2単位）〔1年生で「地理A」（2単位）を既習。〕、2000年10月～11月に実施した。対象生徒は24名。

授業の概要（1単位時間＝50分）

（1）元青年海外協力隊隊員（現大学院生）の授業
〔モルディブ①〕。・モルディブの文化。
〔モルディブ②〕。・青年海外協力隊の活動。
（2）青年海外協力隊隊員との交流授業①
・「フィリピンのイメージ」と「Sさんへの質問」
青年海外協力隊隊員との交流授業②
・「クイズ！　フィリピンの不思議!!」
・ビデオ「HOPE-フィリピンからのメッセージ」
青年海外協力隊隊員との交流授業③
・「クイズの答え」と「質問の答え（その1）」。
・ビデオ「フィリピンで変わっちゃった（その1）」
青年海外協力隊隊員との交流授業④
・「質問の答え（その2）」。
・ビデオ「フィリピンで変わっちゃった（その2）」

本校では、進学希望の生徒が少ないため、選択科目では、受験に縛られずかなり自由な授業が展開できる。そこで筆者は、生徒の興味・関心を喚起すべく「グローバル時事問題」を取り上げ[1]、

生徒の共感的理解や主体性を喚起すべく「シミュレーション」教材[2)]等を活用している。また、外部講師を招く授業も積極的に行なっている。国際援助に携わる講師の方の授業から、生徒達が大いに刺激を受けるからである。

(1) 元青年海外協力隊隊員（現大学院生）の授業

モルディブで卓球指導をされた元青年海外協力隊隊員(現大学院生)のNさんの授業である。1回目は卓球実演と文化、2回目は協力隊の説明をして頂いた。この授業は、次回以降の導入として位置付く。

(2) 青年海外協力隊隊員との交流授業

①理数科教師Sさんの授業の1回目。「フィリピンのイメージ」と「Sさんへの質問」を生徒に問う(参考に、Sさんから受信したデジタルカメラの写真を回覧した)。

〔「フィリピンのイメージ」に関する記述（抜粋）〕

- バナナがいっぱいありそう。野生っぽい。島が多い。1年中暑い。黒人が一杯いる。
- 日本のキャバクラにフイリピン人が多い。
  →女の人が黒い。目つきがこわい。日本語が通じない。
- 暑い。バナナ。水がいっぱい。海がきれいそー。雨の日が多そうだ。虫多そう。

フィリピン＝バナナ、南国＝黒人など、短絡的で偏見に満ち、かつ否定的なイメージが多かった。次時以降、認識を変化させていくことが課題となった。

〔フィリピンについての生徒の質問（抜粋）〕

- フイリピンでは、どんな食生活をしていますか？
- 毎日どんなことをしていますか（スポーツなど）？
- フイリピンで流行っているものはなんですか？
- マクドナルドはありますか？

質問は、衣食住など日常の生活に関するものが多かった。Sさんから、生徒の反応を元にクイズを作成したものを、Eメールで送付して頂いた。

②Sさんの授業の2回目。「クイズ」を解いた後、ビデオ「HOPE-フィリピンからのメッセージ」を視聴し、フィリピンの人々の暮らしについて学習した。

〔「クイズ！フィリピンの不思議！！」（抜粋）〕

問1. フィリピンに多いのは次の中のどれ？
①おかま②お坊さん③中国人
問2. フィリピン人の90%以上が信じる宗教は？
①仏教②イスラム教③キリスト教
問3. フィリピンの公用語は？
①タガログ語②英語③スペイン語
問4. フィリピン人があまりしないバナナの食べ方は？
①冷やしたり凍らせて食べる②ゆでて食べる③油で揚げて食べる
問5. フィリピンの食べ物は・・・？
①甘い②辛い③スパイシー
問6. フィリピンで見ていないファーストフード店？
①ピザハット②モスバーガー③ミスタードーナツ
問7. フィリピン人が幸せの証と信じているもの？
①白髪②ほくろからはえてる毛③抜けた歯
問8. イロイロは変わった名前ですが、まだ変わった地名があります。実際無いのは？
①バイバイ②コイコイ③チョコレートヒルズ
※ クイズはSさん作。(下線部が正解)。

クイズは、常識をひっくり返す内容もあり(例：問1、問7)、生活文化を楽しく理解できる教材である。

〔ビデオ「HOPE-フィリピンからのメッセージ」の概要〕

ミンダナオ島で孤児院を開いた元青年海外協力隊員や日本人神父の話、孤児院の子、スモーキー・バレーの人々、豚の丸焼きを食べるシーン、コンサートで唄う盲学校の生徒等で構成。貧しくとも明るく生活しているフィリピン人の様子が伝わる。

(関西大学久保田ゼミ製作、18分)。

③Sさんの授業の3回目。「クイズの答え」と「質問への答え」(共にSさん作)を配布した後、ビデオ「フ

ィリピンで変わっちゃった－学生たちの暑い夏－」(読売TV「ドキュメント'00」2000年7月23日放送)の前半約30分を視聴させ、感想を書かせた。

「クイズや質問の答え」への生徒の反応は、「おかまが多い」等の意外な正解に、強い興味を示していた。

〔ビデオ「フィリピンで変わっちゃった(その1)」の概要〕

6人の大学生が、体験学習でフィリピンを旅行した。ネグロス島でのホームステイでは、風呂やトイレが無く困ったが、大家族の暖かさを感じた。老人から日本軍の加害行為を聞いた。シキホール島では、日本人の「買春ツアー」客と遭遇した。

④Sさんの授業の4回目。「質問の答え②」(Sさん作)の配布後、ビデオ「フィリピンで変わっちゃった」の後半約25分を視聴。その後、「新たな質問」を問うた。

〔ビデオ「フィリピンで変わっちゃった(その2)」の概要〕

電気の無い山奥の村でも、学生たちは、日本軍の残虐行為の話を聞いた。マニラに戻った一行は貧富の差に驚いた。しかし「スモーキーバレー」では、貧しい人々が千人以上も暮らしている。衛生状態が悪く病院にも行けず、簡単に人が死ぬ。

〔ビデオの感想例〕

・田舎と都会の貧富の差が激しすぎると思った。 ・お金が無くて病院に行けなくて死んでしまう人が多いとは知らなかった。 ・ゴミの山で働いている子供達を見て悲しかった。

〔Sさんの「質問の答え②」に対する感想例〕

・ゲームとか携帯電話でのメールを皆やっているとあったので、日本とあまり変わりないことを確信！！。 ・マクドナルドがあるとは思わなかった。 ・生活や習慣が、じょじょにわかってきた。

〔生徒たちの新たな質問例〕

・食べ物で牛肉はあるのですか？ ・どんなゲームソフトが人気ありますか？ ・おかまバーはありますか？

「生徒たちの新たな質問例」を見て、当初は「質問のレベルが上がっていないと思いがっかりした。生徒たちの興味・関心が、生活文化のレベルに留まっていたからである。Sさんの「クイズや質問の答え」により、質問への回答は十分されていたことより、生徒たちの興味・関心は、ビデオで扱ったような社会問題(例：貧困、日本軍の加害行為、「買春ツアー」等)に発展すると予想していたからである。

しかし、今振り返ると、生徒達は、社会問題についてはビデオ学習で十分と考え、Sさんに、あえて生活文化の質問を続けていたとも考えられる。この方向で授業を展開し、調査学習などを踏まえ、生徒の認識を深化させる方策もあったと反省している。なお、当初の課題であった生徒達のフィリピン認識については、Sさんからの豊富な生活文化の情報とそれへの質疑応答により、かなり深められたと考える。

(3)実践をおえて

Sさんの多大な協力(多忙の中、「クイズ」や「質問の答え」等を作成して頂いた)により、授業を実施できた。しかし、前述したように、生徒の興味・関心から学習課題を引き出す過程で課題が残った。その他、今後の課題を以下に挙げる。第一に、事前に教員と協力隊員との間で、学習課題について相談する必要がある。生徒の興味・関心に委ねるだけでは、学習課題が拡散しがちだからである。この場合、特に協力隊員の方の専門性を活かす方向で、課題を設定することがよいと思われる。第二に、一人の隊員に多くの生徒が質問をする構造になるため、隊員の負担が大きくなる。しかも隊員は、短期間に返信する必要がある。負担軽減のためには、教員側で、質問を整理する必要がある。第三は、視聴覚情報の必要性である。授業を進める際、Eメールだけでは、生徒の興味・関心を持続させることは困難である。そこで写真やビデオを利用するのだが、その場合、やはり静止画より動画がよい。理想を言えば、隊員の紹介ビデオがあり、肉声が伝えられることが望ましい。第四に、教員と隊員の信頼関係が重要である。その

際、どうしても1年目は試行錯誤となることが多いので、「2年計画」で実施することが望ましい(2001年度の学習計画としては、Sさんが、「スモーキー・バレー」を訪問されたこともあり、「貧困」の問題を学習の中心に据えたいと思う)。

3. 新たな異文化理解教育の可能性

この実践では、24名の生徒に対して1名の隊員が対応した。他に生徒を小グループに分け隊員と交流するものも考えられる。その事例についての紹介は別の機会に譲るとして、このような授業実践から次のような可能性が考えられる。

1 情報が豊富にある先進国ではなく、情報が偏りがちな途上国の様子が具体的にわかる。
2 質問事項は、身の回りや自分の体験から出てくるものであり、日本と途上国でのニーズの違いなど、文化の視点から比較考察できる。
3 数ヶ月にわたるやりとりで隊員自身の人生観をも含めて直接意見交換ができる。
4 途上国におけるインターネットの利用環境は一様ではないが、それも含めて体験学習できる。
5 画像の送付も手軽になった昨今だが、画像の力と文章の力の違いが区別できるようになる。また、途上国にいる相手の立場に立って時間や空間を理解するには、瞬時にメッセージが届くインターネットより手紙の方が良いこともあり、理解する項目とメディアとの関連が考察できる。

異文化理解の授業で強調され、驚かされるのは、その意外性や違いであることが多い。しかし、しばらく交流することにより、かなり共通点もみえてくる。時間をかけてやり取りすることにより、違いだけでなく、共通点も教えることができ、より望ましい国際理解教育となるのではないかと思われる。

さらに隊員にとっても生徒からの質問を受け、現地を別の視点で見直すきっかけになるようだ。

注

1) 1999年度は「コソボ紛争」を「難民問題」の視点で取り上げた。

「高校『難民問題学習』の実践報告「グローバル時事問題『コソボ紛争』を中心として」開発教育協議会『開発教育』№43、2000年、pp. 84－88を参照。2000年度はNIE（新聞を用いた授業）で「朝鮮半島南北首脳会談」等を取り上げた。

2) 「難民体験シミュレーション」や「差別体験シミュレーション」等、前掲　の拙稿を参照のこと。